

東京オリンピック マラソン・ランナー 円谷幸吉に関する病跡学的研究

中 広 全 延

1. 東京オリンピック

1964年10月10日から10月24日まで、アジアで初のオリンピックが東京で開催された。その陸上競技最終種目男子マラソンにおいて、円谷幸吉（こうきち）はみごと3位銅メダルに輝いた。

前回ローマ・オリンピックに裸足で出場し優勝したアベベ・ビキラ（Abebe Bikila）が、他選手を圧倒的大差で引き離し余裕の1位であった。円谷はゴールがある国立競技場のトラックにアベベに次いで入ったが、それまで後続を走っていたベシル・ヒートレー（Basil Heatley）にトラック上で追い抜かれてしまう。円谷は最後の力を振り絞ったがヒートレーにおよばず、ヒートレーは残しておいた力でラスト・スパートをかけ2位でゴールインした。円谷はすべての力を出し尽くし、意識朦朧となりながらゴールラインを通過すると地面に倒れこんだ。

このドラマは、東京オリンピックの記録映画におけるクライマックスを、否、東京オリンピックにおけるクライマックスを形作っている、と私には見える。「裸足の王者」アベベを、円谷とヒートレーの国立競技場トラックでのデットヒートを、ある年齢以上の日本人で知らぬ者はないであろう。

東京オリンピック開会直前の1964年10月1日には東京―新大阪間に東海道新幹線が開業し、当時日本は高度経済成長の真ただ中であった。東京オリンピックは、戦後日本の復興を象徴する国家的プロジェクトであり、1970年大阪で開催された万国博覧会とともに、高度成長期を代表するビッグ・イベントだった。

円谷幸吉が活躍、奮闘したのはそういう時代である。彼は時代精神の体現者であった、と私は考える。

競技場のトラックを出てからも、ドラマ、悲劇は続く。次回メキシコ・オリンピックにむけ練習中であった円谷が、1968年自殺したのだ。

2. メランコリー型うつ病

自殺したから精神の病気であった、と無条件に言えるわけではない。円谷幸吉はメランコリー型うつ病の患者に典型的な特徴を示しているが、うつ病だったかどうか即断できないことは

後ほど述べる。もしうつ病でなかったとしても、彼の軌跡を追うこと、彼を精神医学の視点から見ることは、それは現在問題となっているうつ病を考える上で有意義と思われる。

ここでいう「メランコリー型うつ病」とは、DSM¹⁾が定めるところのものではなく、ドイツ流の古典的・伝統的な精神医学の用語で「内因性うつ病」といわれるものに相当する。気鋭の精神科医、松浪克文は、内因性うつ病も時代とともに移り変わり病像が従来とは違ってきたとし、軽症のそれを「現代型（内因性）うつ病」と命名している²⁾。そうであれば、ここでの「メランコリー型うつ病」は従来の内因性うつ病とご理解いただきたい。

では、内因とは何か。

ドイツ流の精神医学が、慣例として伝統的に使っている専門用語である。慣例と伝統が違う精神医学体系、例えば現代米国流のDSMに、「内因」という言葉は登場しない。先年亡くなった（2002年没）精神病理学者、精神科医の西丸四方によると、「内因というのは外の作用によるのではなく、内（心ではない）からひとりだけで生ずるという意味である」³⁾。もともとそういう意味であるが、精神医学の発展とともに、内因の概念は変遷してきた。

内因性精神病の代表が統合失調症と躁うつ病（教科書的には、うつ病は躁うつ病に含まれる）であるが、両者ともその本体はわかっていない。精神医学における最も重要な病気が解明されておらず、それらを「内因性」と呼んでいるのだから、内因とは何か、明快かつ手短かに説明できなくても仕方がない。ゆえに、論者によりニュアンスが異なることがある。内因は精神医学における非常に重要な概念とする考え方から、原因不明の別称とかがたづけてしまうものまである。「今のところこの2種の精神病（統合失調症と躁うつ病の二大内因性精神病：筆者註）があるかのように取扱っておくと便利であるというだけのことである（太字強調は原著者）」と、西丸四方はストレートに言っている³⁾。原因は不明でも内因性精神病各々の輪郭はかなりはっきりしており、「内因」は精神医学を知る者にとっては便利な言葉である。

ところで医学は、特に基礎医学ではなく臨床医学は、非常に社会的なものである。よって社会的に重要な病気が、医学において重要な病気となる。言い換えれば、患者数が多い病気、つまりありふれた病気が重要となる。医学は理論的整合性などより実用性、有用性をまずは要求されるので、ある病気の患者が増えればそれへの対応を迫られる。

メランコリー型うつ病（＝従来型内因性うつ病）は、過去の日本において、うつ病の最も多いタイプであった。ゆえに、それがうつ病のなかで最重要と認識されていた。うつ病といえはメランコリー型うつ病を指す、あるいはそれがうつ病のすべてであるかのごとく思われていた時期が存在する。

いつ頃からこのタイプがうつ病の主流でなくなったか、厳密に定めるのは難しい。1970年代後半に指摘され始め、遅めに見積もっても昭和が終わり平成となった前世紀末1990年代には顕在化していた。メランコリー型うつ病の減少は、日本の高度成長が完結し社会経済構造と日本人の精神構造が変化したことに連動する、と考える人が多い。

中広：東京オリンピック マラソン・ランナー 円谷幸吉に関する病跡学的研究

昭和の時代精神が、メランコリー型うつ病につながる。それがすたれたとき、メランコリー型うつ病も減る運命をたどった。どんな病気でも少なくなるのはいいことだ。しかし皮肉にも、別種の憂鬱（ゆううつ）がそれから蔓延していく。

3. 症例 M

メランコリー型うつ病（＝従来型内因性うつ病）とはどのようなものか、具体例をあげて説明しよう。

症例 M

Mさんは40歳代後半男性のサラリーマンである。大学を卒業し現在勤めている会社に就職した。性格的には几帳面であり、なにより人との争いを避け協調性にあふれ、他人への配慮を怠らず、人から何か頼まれるとことわれない性分である。仕事熱心で責任感が強く、周囲から律儀で堅実な人、模範社員と信頼され、人並みに昇進してきた。今回住居から遠い支店へ栄転したが、子供が大学受験をひかえており、単身赴任した。

はりきって仕事に打ち込んでいた M さんだったが、自分でも仕事の能率が落ちているのに気が始めた。頭重感に悩まされ食欲不振で胃腸の具合も悪く、体重は減少し、この頃どうも体の調子がすぐれないと感じていた。また不眠となり、眠るためお酒の量が増えていったが、全然お酒がおいしくなかった。朝早くから目が覚め、そのうち会社で机に向っても仕事がまったく進まない状態にまでなってしまった。

「こんなことではいけない」と自身を叱咤激励する M さんであったが、状態は改善するどころかどんどん悪くなり、仕事だけでなく日常何をするのもやる気がなくなり、頭の回転まで鈍くなったようであった。気分は陰鬱、お先真っ暗で、将来への漠然たる不安がつり、イライラすることも多くなった。また M さんは、このような状態に陥ったのは会社や誰のせいでもなく、すべて自分の責任で「会社に申し訳ない」と思っていた。

いよいよ「もうダメだ。生きていても仕方がない」という考えが頭を占めるようになった。朝から午前中にかけて特に調子の悪い M さんだったが、とうとうある朝、駅のホームから電車に飛び込もうとした。

まさにそのとき、携帯電話が鳴った。深く考えずいつもの習慣で誰からの着信かチェックすると、妻からであった。彼は電話にでた。電話が何の用件だったか思い出せないが、自分が自殺しようとしていることを率直に話した。妻はびっくり仰天し、絶対にそのようなことはしないよう、すぐにそちらに行くから待っていてほしい、と頼んだ。M さんも自分の現状を語ったことで、妙に心の平静を取り戻した。

妻は、夫が誰でも罹るという「こころのカゼ」だと思い、乗り気でない M さんをメンタル・

クリニックに連れて行った。Mさんは自分がうつ病であることを初めは認めなかったが、妻の説得もあり、うつ病の治療を開始した。抗うつ薬など治療が奏効し、「うつ病を経験しそれから回復したMさん」として、同じ職場ながら新たな人生を踏み出している。

この症例Mは、実在の患者ではなく私の創作である。わかる人が読めば、あまりにもメランコリー型うつ病の特徴が羅列してあり戯画化されさえしている。症例報告ではなく、見本展示である。

少し芸があると言えば、まったく偶然の妻からの電話でMさんが自殺を踏みとどまるどころであろう（あまりに都合よいタイミングなのでわざとらしいが）。自殺しようとする人にとって、何気ない一言でさえ他者からの働きかけとして、場合によっては他者の存在そのものが、自殺遂行を阻止することがある。その逆もあるかもしれないが。

4. Typus melancholicus

精神の病気の研究において、その病気がどのような性格傾向を持つ人に多いか調べる方法がある。その人が病気になる前の性格、病前性格を問題にするのである。ドイツの精神病理学者テレンバッハ（Hubertus Tellenbach）は、うつ病の病前性格としてTypus melancholicus（メランコリー親和型）を提唱した⁴⁾。

「このテレンバッハの説は、全世界的に受け入れられたと言えるのかどうか微妙なところだと思うが、日本では妙に受けた」と、2004年に発足した日本うつ病学会の理事長（本稿執筆時）で精神科医の野村総一郎は、軽妙に語っている⁵⁾。確かに少なくとも日本では、テレンバッハは一世を風靡した。ところが、アメリカあたりでは注目されなかったらしい。

このようなすばらしい説がアメリカで無視されるのはいかなることか？ と疑問を口にする人もいた。ドイツの、ヨーロッパの哲学的色彩が強いテレンバッハの議論が、アメリカでは受け入れられにくい、と思われた。だが、真理は開陳されてくる。

メランコリー親和型は、メランコリー型うつ病（＝従来型内因性うつ病）だけの病前性格だったのだ。

当時の日本では、うつ病患者の多数がメランコリー型うつ病だった。〈うつ病＝メランコリー型うつ病〉との等式が近似的に成り立っていたので、誤差は無視できた。当てはまらない症例は少数であり例外とされた。ところが、時代が移りメランコリー型うつ病が減り他のタイプのうつ病あるいはうつ状態が増えてくると、メランコリー親和型を病前性格としない患者が目立ってくる。

メランコリー親和型とは、どのようなものか。『精神医学事典』の「メランコリー親和型」の項目⁶⁾から引用してみよう。

中広：東京オリンピック マラソン・ランナー 円谷幸吉に関する病跡学的研究

「メランコリー親和型の本質的な存在様式は、(1)自己の生きる世界の秩序（Ordnung：個人の日常生活を日常生活たらしめているものの総体）への志向性が「几帳面」という形で固着しすぎていること、および、(2)自己自身にむけられた要求水準が高すぎることに分けられる。彼らは秩序に閉じ込められその境界を乗り越えることができないだけでなく、自己自身に対して量的にも質的にも過度に高い要求水準をかけた、それに遅れをとったときその不全感を負い目として体験する。このタイプの具体的な性格像としては、職業生活では、几帳面、強い責任感、堅実、綿密、勤勉、仕事の虫などとして現われ、対人関係では、誠実、律儀、世話好き、家族おもしろい、権威と序列の尊重と評価される（中略）一方、このような類型の人間にとって、秩序の境界を乗り越え新たな秩序の営みに到達することが迫られるような事態、たとえば、引越し、住居の改築、転職、定年、近親者の死、結婚、出産、閉経などはメランコリー（＝うつ病：筆者註）発症の危機的状況であり、感冒や捻挫などの軽い身体の不調さえも同じ状況となりうる」

メランコリー親和型の人、ひらたく言えば、キッチリ真面目人間なのだ。

上の対人関係における特徴は、他人への配慮とまとめることができる。また彼らは協調性とみ、ある意味それが過剰なので、「同調性」と表現されることがある。

必然的に、それまで社会適応が良好で立派に仕事をしてきた中高年者に多い、ということになる。

5. 状況因

「発症の危機的状況」について、同じ事典の「状況論」の項目⁷⁾は次のように記している。

「たとえばうつ病を誘発する結婚、出産、就職、昇進、家の新築、引越しなどのできごとは、正常心理からすれば日常的なできごとであり、長い期待のかなった喜ばしい、いわば逆説的な事態である場合も多いし、またそのできごとと発病との関連は病者の体験的次元ではほとんど意識されず、意味関連を十分にたどれないのがふつうである」

原因と結果の意味のつながりが理解できる、つまり意味関連が了解可能な、心理的原因により精神の病気が起こるとき、それを心因と呼ぶ。悲しいことが原因でうつ病になる、これはわかりやすい。しかし、従来うつ病患者は昇進、栄転しても、喜ばしいことであっても発病する。これでは心理的に逆ではないか、「いわば逆説的な事態」ということもあって、「心因」に対して「状況因」という言葉が登場した。

「秩序の境界を乗り越え新たな秩序の営みに到達することが迫られるような事態」が、状況因となる。それは、自分が慣れ親しんだ生活世界（仕事も含めて）の喪失である。

6. 「励ましてはいけない」

ではなぜ、うつ病になるのか。

メランコリー親和型の病前性格をもつ人たちが、手抜きできない性分が災いして、新たな慣れない環境でがんばりすぎてエネルギーを消耗しつくしてしまう。これがメランコリー型うつ病発症のメカニズムであり、うつ病とはエネルギーの枯渇である、との仮説が日本で広く受け入れられてきた。

〈メランコリー親和型性格＋状況因→エネルギー枯渇＝うつ病〉

という図式である。

上の「エネルギー」とは、精神的エネルギーだけに限定せず、全人的エネルギー、生きる力、と表現したほうがよいようなものを想定している。自然科学が対象とする物理量とは違い厳密に定義し測定できるはずもなく、曖昧と言われれば曖昧な概念ではある。

メランコリー型うつ病発症には、メランコリー親和型性格と状況因だけではならずさらに他の要因も必要、とする説がある。図式にすれば、

〈メランコリー親和型性格＋状況因＋X（または $X_1+X_2+\dots$ ）→エネルギー枯渇＝うつ病〉

である。X (X_1, X_2, \dots) は、生物学的要因かもしれないし、内因を入れる人もいる（状況因と内因を並立させる考え方である）。

治療については、まず休養で、具体的には仕事を休むこと（学生ならば休学）であり、抗うつ薬がよく効くとされる。この治療方法が有効であることが、上記の仮説を補強していたように思われる。休養はエネルギーを回復させ、抗うつ薬はX（生物学的要因）に効くのだろう、というふうに。

また、メランコリー型うつ病患者への励ましは厳禁とされる。暗くふさぎこんだ人を励ましたくなるのは人情だが、叱咤激励はヘトヘトに疲れきってゴールインしたマラソン・ランナーにもう一周トラックを走ってこいと命令するようなもので、残酷きわまりない。下手をすると自殺への最後のひと押しになりかねない。

近頃は新聞や雑誌にも、「うつ病の患者を励ましてはいけない」と書いてあるらしい。正確には「メランコリー型うつ病の患者を励ましてはいけない」である、と私は思う。「メランコリー型うつ病」とせず単に「うつ病」としている点が、うつ病・うつ状態にはいろいろあることが十分説明されていない点が、「メランコリー型うつ病」以外のタイプが増えている今、混乱をまねいている元凶ではないか。

7. 病跡学の方法

啓蒙書などに出てくる症例はたいいてい、プライバシーに抵触せず病気をわかりやすく説明するため、多数例からその病気の特徴を抽出し合成した理想型の提示である。学術的な症例報告でも、患者のプライバシー保護のため、改変がほどこされる。

これに対し病跡学は、改変がほどこされていない、ひとつの徹底した症例報告という側面を持つ。しかしいくら学問研究でも、ある人物についてあれこれ詮索するのはプライバシーの侵害にならないか。偉業を成し遂げた人は、有名税を支払わなければならないのか。

遠い昔の偉人や英雄であれば問題はない、との常識的コンセンサスが病跡学において存在する。だがここで取り上げる円谷幸吉は、40年前まで生きていた人である。40年の時間は十分に長いかどうか、それは昔かどうか、意見がわかれるかもしれない。経過時間だけ見れば、彼より後に亡くなった三島由紀夫や川端康成を病跡学で取り上げても、それをプライバシーの侵害と言う人はいないように思う。

本研究における病跡学的考察は、すべて既に公表され活字になった情報を素材としている。

このあたりの病跡学の方法に関しては、拙著⁸⁾の「Ⅲ章 病跡学」に詳しく論じてあるのでご覧いただきたい。

8. 生涯

円谷幸吉の生い立ちから見ていこう。以下の記述は、ノンフィクション作家、橋本克彦著の伝記⁹⁾による。

円谷幸吉は、1940年5月13日福島県須賀川町に、農業を営む父幸七と母ミツの六男一女の末っ子として生まれた。幸七は厳格な人物で、礼節をもって、骨身を惜しまず、率直に、誠心誠意を尽くすよう、子供たちをきびしくしつけた。この父の教えを、幸吉は過剰なまでに内面化したように思われる。当時の農家の常として、幸吉は家の仕事の手伝いに忙しかった。

高校時代、陸上部に入り陸上選手としてのキャリアを始めるが、成績はインターハイ、国体ともに予選落ちで決してトップクラスではなかった。

国体で予選落ちしたとき、実力からは当然予想される結果だったにもかかわらず、「先生、申しわけありませんでした」

と、ポロポロ涙を流して頭を下げたという。

1959年高校を卒業し、陸上自衛隊に入隊する。自衛隊駐屯地での勤務生活はすべて日課が決められたものであった。現代の多くの若者たちにとって苦痛であろう規律に従った生活に、幸吉はすぐ順応した。もともと彼の人となりは、そのような規則正しさにマッチングがよかった。

一緒に風呂に入ったある友人は、円谷が脱衣場で脱いだトレーニングシャツやトレーニング

パンツをデパートの売り子が包装するようきちんとていねいに、馬鹿がつくほどていねいにたたんだ、と回想している。これはなにも衣服のたたみ方だけでなく、万事すべてにわたったであろう。彼の性格をよくあらわす逸話である。

駐屯地で自由時間ができると、ランニングの練習を始めた。いろいろな陸上競技大会に出場し好成績をあげ、特別扱いで練習時間を許可されるようになる。彼はそれを自分の特権とは思わず、上官や同僚が一目置くほど真面目に黙々と日課と任務をこなす模範自衛官であった。

第一回自衛隊全国管区対抗駅伝競争で第一区10キロを走ったとき、期待に反して自他ともに認める不本意な結果に終わり、

「今日は私が一番申し訳なかった。頭を坊主にしたので勘弁してくれ」

と、本当に頭を坊主刈りにして他の選手やコーチに深く謝罪し、「だれにでも好不調の波があるのだから、坊主になるほどのことはないのに」と思う彼らを驚かせた。

彼の實力は周知のものとなり、1962年4月自衛隊体育学校に入学、自衛隊内からオリンピックを目指すこととなる。彼にとって走ることが任務となった。10月にはオリンピック強化選手に選ばれ、当時は指導者（コーチ）にも恵まれた。

円谷を指導することになったオリンピック強化コーチは、初対面時、円谷の精神面をチェックするつもりで、彼に一日ではとうてい消化しきれないトレーニング・メニューを課した。彼は平然と指示された練習をこなし、円谷をよく知らず人格テストのようなことをしたコーチのほうを根をあげて途中でやめさせた。

彼はいったんやりだしたら決して途中でやめない。走り出したら最後までがんばる。彼の長いと言えない人生に、この手のエピソードは事欠かない。

円谷は順調に成果を上げていった。当初は、陸上五千メートル、一万メートル競技を目指していた。それがぜひともマラソン競技でメダルをとの陸連やオリンピック強化本部の意向により、マラソンに転向する。東京オリンピックでは一万メートルとマラソンに出場し、一万メートルは6位に入賞した。本稿の冒頭で述べたように、マラソンでは銅メダルを獲得し、国民的スターとなり、英雄となる。

レース後のインタビューで、
「もっと練習してアベベさんともう一度走りたい。四年後のメキシコ・オリンピックを目指します」

と、彼は語った。メキシコ・オリンピックへの抱負を述べただけであるが、彼自身は日本人全員に銀メダル以上を約束したような気になったのではないか。世間も、そう理解したかもしれない。

1966年陸上自衛隊幹部候補生学校に入学し、自衛官として昇進を約束される。が、自衛官とマラソン・ランナーとの両立は難しく、それまでのコーチが自衛隊内部の転属で彼から離れざるを得なくなり、よき指導者、理解者を失うことになる。また婚約破棄という人生上のトラブ

ルにも見舞われた。

科学的なトレーニングを行うべきときコーチがおらず、精神力に頼るハードなスケジュールをこなしていた。自衛隊体育学校に、オリンピック・メダリストの走り過ぎを制止できる人物はいなかった。

そこへ以前からの持病の腰痛が再発した。さらに、腰をかばいながらトレーニングをしていたのがアキレス腱への過重な負担となり、練習中に右アキレス腱を損傷してしまう。いよいよ腰痛の根本的治療をすべきと判断され、1967年8月8日椎間板ヘルニアの手術が行われた。手術自体はうまくいったが、コーチ不在のトレーニング、そのうえ故障と手術で、走力が落ちたのは当然であった。メダルどころかオリンピックに出場できるかどうかさえわからない状況だったが、世間はそのようなこととはつゆ知らず、東京オリンピックの英雄、円谷幸吉に期待していた。メキシコ・オリンピック開催前年1967年の大晦日に放映予定の「メキシコで日の丸を」というようなテレビ番組の取材も、彼にはあった。

暮れの12月自衛隊体育学校陸上班の合宿が伊豆の下田で行われたが、彼は走るのを諦め他選手の前を自転車で伴走した。その地から元コーチに、現役を引退し今後は後進の指導にあたりたい、との文面の手紙を出している。少なくともこの手紙では、自分の限界を受け入れたように書いてある。ところが、年明け彼からの年賀状に「今年もよろしく願います。メキシコを目指しておおいにがんばります」とあるのを見た人も少なからずいた。

腰の手術前より須賀川の実家のほうで進んでいた彼の縁談の話が暮れには本決まりとなり、彼はそれをとても喜んでいたのである。年末年始の休暇に入り、彼は実家で家族と過ごした。大晦日、円谷家の兄弟一同が勢ぞろいした。正月2日は円谷家の新年宴会があり、3日彼は近所の年始回りをし、東京オリンピックのとき「円谷幸吉を応援する会」を作ってくれた同級生の家を訪れたりもしている。

彼は当時、自衛隊体育学校の教官であり、1月5日体育学校の宿舎に戻った。学校はまだ冬休み中だった。8日の月曜日と9日の火曜日に彼は休暇をとっていたので、7日の日曜日から三連休となる。9日の朝、同室者が隊に帰ってきて、部屋の内側から鍵を掛けて自殺していた彼を発見する。死亡推定時刻は7日夜から8日未明にかけてであった。遺書は、奇妙なことに、机の引出しの裏にテープで貼り付けられていた。

9. 遺書

東京オリンピックの英雄、円谷幸吉の自殺は、世間に強い衝撃を与えた。

三島由紀夫は、円谷ノイローゼ説を憶測する人々に強く反発する追悼文を公表した。三島由紀夫に言わせれば、「円谷選手のような崇高な死」を病跡学・精神医学の研究分析対象にする行為は「生きている人間の思い上がり」であり、その「醜さは許しがたい」となるであろう。

川端康成は、遺書に言及した。

遺書は二通あり、ひとつの封筒に入っていた。一通は便箋二枚分で家族あて、もう一通は便箋一枚の自衛隊関係者あてである。

家族あてのものは、以下のとおり（句読点、改行などは、橋本克彦の写し取り⁹⁾による）。

「父上様 母上様 三日とろろ美味しう
ございました、干し柿、もちも美味しうござい
ました、
敏雄兄、姉上様、おすし美味しうござい
ました、
勝美兄姉上様、ぶどう酒、リンゴ美味
しうございました、
徹兄姉上様、しそめし、南ばんづけ美味しう
ございました、
喜久造兄姉上様、ぶどう液、養命酒美味しう
ございました、又いつも洗濯ありがとうございます、
幸造兄姉上様、往復車に便乗さして戴き
有難とうございました、モンゴいか美味しうござい
ました。

（筆者註：これらの食べ物は円谷家の正月のお膳にならんだ品々である。この後、甥と姪17人ひとりひとりの名前をあげてから「立派な人になって下さい。」と続く。）

父上様母上様、幸吉は、もうすっかり
疲れきってしまって走れません
何卒 お許し下さい。
気が安まる事なく、御苦勞、ご心配をお
掛け致し申し訳ありません、
幸吉は父母上様の側で暮らしとうございました、」

自衛隊関係者あてのものは、四人の上官各々に「済みません」と謝る文章に続き、
「メキシコオリンピックの御成功を祈り
上げます、
一九六八・一」
で終わっている。

中広：東京オリンピック マラソン・ランナー 円谷幸吉に関する病跡学的研究

川端康成は遺書について、「この簡単平易な文章に、あるひは万感をこめた遺書のなかでは、相手ごと食べものごとに繰り返かへされる「おいしゅうございました。」といふ、ありきたりの言葉が、じつに純ないのちを生きてゐる。そして、遺書全文の韻律をなしてゐる。美しくて、まことで、かなしいひびきだ」と、文学的見地から評価している¹⁰⁾。

川端康成の論評に付け加えるものはないようだし、三島由紀夫から批判されるのもわかりきっているが、ここでは病跡学的考察を試みる。

10. 「幸吉は、もうすっかり疲れきってしまつて走れません」

第8節でみたように、円谷幸吉は、几帳面、強い責任感、堅実、勤勉、誠実、律儀といった性格の持ち主である。自衛隊に入隊しそこで着実に昇進していったのは、陸上競技ですばらしい成果をあげたからでもあったが、彼の「権威と序列の尊重」という在り方によるものであり、それを欠いてはそもそも自衛官という職業が勤まらないであろう。

彼は、絵にかいたようなメランコリー親和型の人間である。

メキシコ・オリンピック開催の前年1967年の暮れには、いよいよ肉体的に限界となり、オリンピックへの道をあきらめ、引退せざるを得ない状況に追い込まれていた、と想像される。伊豆の下田で行われた合宿で他選手が走るのを見ていた彼は、考えようによっては現役を引退し後進の指導に専念する未来の円谷幸吉である。

彼は、未来に向かって考えられない。

「メランコリー親和型存在様式は、自己の生きる世界の秩序へ固着しすぎていること」である。彼にとって走ることが「自己の生きる世界の秩序」であり、自分が走らず他人が走るとき状況は「世界の秩序」の崩壊以外の何ものでもない。彼は、走るという「秩序に閉じ込められその境界を乗り越えることができない」。

メランコリー親和型の人間は、新しいことへのチャレンジを避け、それよりも、同じことの繰り返しに得意であり、繰り返しを好む。彼の遺書に「美味しゅうございました」という言葉が繰り返されるのは、メランコリー親和型存在様式の発現であろうか。それが結果として、韻律をなし「美しくて、まことで、かなしいひびき」となっている。

またこの「美味しゅうございました」は、礼を忘れない配慮とも解釈できる。他人への配慮は、メランコリー親和型の特徴である。

「遺書といふことの偶然の所産であるが、また円谷選手の性格と人生とが、ここにおのづから凝まつて成した必然の文章であつた」¹⁰⁾ (川端康成の原文のまま引用)。

1967年の暮れ、元コーチに現役を引退したいと書き送っている。年明けの年賀状には「メキシコを目指しておおいにがんばります」とある。迷っていたのか。彼にとって、後進の指導という「新たな秩序の営みに到達すること」は容易でない。メランコリー親和型存在様式つま

り自分の性格を放棄しないかぎり、「おおいにがんばります」以外の選択肢はないのではない。この期におよんで、性格を変えろというのは無理な相談である。

みな、東京オリンピックの英雄、円谷幸吉に期待した。テレビの取材でも、郷里に帰っても、みな「がんばれ、円谷」と声援を送ったであろう。それを無視することは難しい。律儀なメランコリー親和型の人間には、なおさらである。東京オリンピックのとき「円谷幸吉を応援する会」を作ってくれた同級生に、「メキシコ・オリンピックには出場しない（出場できない）」と、彼は絶対に言えなかったはずである。

「幸吉は、もうすっかり疲れきってしまって走れません」

彼は、疲労困憊の極限だった。本来は休息すべきである。こんなとき、さらに「がんばれ」と言うのは残酷である。

その言葉は、彼に、絶望しか生まなかった。

11. 了解可能性の地平

遺書には他人を非難、批判する調子は微塵も無く、「何卒 お許し下さい」「申し訳ありません」と謝るばかりである。自責の念は、メランコリー型うつ病の症状である。一方、レースの結果が思わしくなかったとき詫びたエピソードが示すように、彼は元来性格として自責的である。

彼は、うつ病だったのだろうか（もしうつ病だったとしたら、もちろんメランコリー型うつ病である）。

伝記⁹⁾を読むかぎり、彼がうつ状態を呈していたという記述はなく、最後の正月も家族は彼に異常を認めなかったようである。1月6日と7日自衛隊体育学校で彼に会った誰も特に変わったことは感じなかった。いくら病前性格と状況因が完璧でも、うつ状態が存在しなければ、うつ病ではない。

（筆者註：「うつ状態」は状態像、症状を示す言葉であり、「うつ病」は疾患単位を示す言葉つまり病名である。精神医学用語として、両者はカテゴリーを異にする。うつ状態はうつ病以外の疾患でも出現しうるが、うつ病においてうつ状態は必須の症状である。）

だがまず、うつ病の可能性から考えてみたい。

遺書の内容からして、彼は疲れきっていた。よって、
〈メランコリー親和型性格＋状況因→エネルギー枯渇＝うつ病〉
の図式どおり、うつ病を発症しても不思議はない。

ただ「すっかり疲れきってしまって」という訴えが、ただちに「エネルギー枯渇」を意味するわけではない。一般的に、必ずしも「エネルギー枯渇」を当人が認識しているとはかぎらないし、主観的な疲労感と比例するともかぎらない。そうではあるが、彼は「すっかり疲れきっ

中広：東京オリンピック マラソン・ランナー 円谷幸吉に関する病跡学的研究

てしまって」エネルギーが枯渇し、うつ病を発症していたとしよう。

今ほどうつ病の啓蒙が進んでいなかった当時、周囲の人たちに、場合によっては本人にも、その兆候が見逃されていたかもしれない。あるいは、抑うつ（＝うつ状態）を自覚していても本人が言わなければ、周りがわからなかったとしても無理はない。あるいは、うつ病発症直後、まだ誰にも気づかれないうちに、自殺が決行されたのかもしれない。

状況証拠はそろっているので円谷うつ病説は魅力的だが、うつ状態に陥っていたとの決定的証拠に欠ける。伝記的記録に即せば、彼は、うつ状態にならず、うつ病を発症せず、いきなり自殺したように見える。

もし何らかの事情で自殺が遂行されなかったら、うつ病を発症していたかもしれない。確かにその可能性は大きい。しかしそれは、うつ病発症前に自殺したと言っているのであり、うつ病を発症せず自殺したと認めることになる。

「自己の生きる世界の秩序へ固着しすぎている」メランコリー親和型の人間が、その秩序が崩壊する状況にいきあたり、絶望する。このストーリーはわかりやすい。了解できる。ゆえに、
〈メランコリー親和型性格＋状況因→エネルギー枯渇＝うつ病〉

の図式以外に、矢印（→）の左側の2項は同じでも、うつ病にならず、

〈メランコリー親和型性格＋状況因→絶望〉

という道筋もありうるのではないか。ところが、そこからうつ病発症へはすぐにつながらないように思われる。絶望した人が必ずうつ病になる、とは言えない。ただ、絶望とうつ病が共存することもあるだろう。次の図式である。

〈メランコリー親和型性格＋状況因→絶望＋エネルギー枯渇＝うつ病〉

彼が「固着しすぎている」ところの、彼が愛してやまぬところの、「自己の生きる世界の秩序」が崩壊すれば、彼は絶望せざるを得ない。その秩序が堅牢であればあるほど、それへの愛が強ければ強いほど、絶望は大きいであろう。

彼が、「走る」という「自己の生きる世界の秩序」にどれほど固着しすぎていたか、それをどんなに愛していたか、伝記的事実から明らかである。彼は、それを失うことが確実になったとき、絶望した。

テレンバッハの人間学はうつ病における了解可能性の地平を広げた、とよく言われる。円谷幸吉は典型的なメランコリー親和型であるが、その軌跡は、彼がうつ病でなかったとしても、了解可能である。

彼の自殺の原因は、了解可能性の地平において、うつ病の有無にかかわらず、絶望である。

12. 秩序愛

メランコリー親和型における「自己の生きる世界の秩序へ固着しすぎていること」は、秩序を愛することだとされ「秩序愛」と呼ばれる。日本語としてこの言葉は少し不自然と感じられる向きがあるかもしれないが、精神医学用語としては定着しているので、専門用語とご了解いただきたい。

ところで、その愛される秩序は、当人が組み上げた秩序ではないか。道徳、伝統、社会体制など既製品からの流用でも、少なくとも強制されたものではなく、好んで本人の意志で選んだものではないか。ならばその秩序を愛すること、秩序愛は、自己愛（narcissism）に通じないか。秩序愛は、自己愛のひとつのバリエーションではないか。

現代の精神医学における自己愛の概念を代表するものとして、DSM¹⁾の自己愛性人格障害（Narcissistic Personality Disorder）があげられる。

以下に、その自己愛性人格障害の診断基準を記す。

診断基準 301.81 自己愛性人格障害

誇大性(空想または行動における)、賞賛されたいという欲求、共感の欠如の広範な様式で、成人期早期までに始まり、種々の状況で明らかになる。以下のうち5つ（またはそれ以上）によって示される。

- (1)自己の重要性に関する誇大な感覚（例：業績や才能を誇張する、十分な業績がないにもかかわらず優れていると認められることを期待する）
- (2)限りない成功、権力、才気、美しさ、あるいは理想的な愛の空想にとらわれている。
- (3)自分が“特別”であり、独特であり、他の特別なまたは地位の高い人達に（または施設で）しか理解されない、または関係があるべきだ、と信じている。
- (4)過剰な賞賛を求める。
- (5)特権意識、つまり、特別有利な取り計らい、または自分の期待に自動的に従うことを理由なく期待する。
- (6)対人関係で相手を不当に利用する、つまり、自分自身の目的を達成するために他人を利用する。
- (7)共感の欠如：他人の気持ちおよび欲求を認識しようとしなない、またはそれに気づこうとしない。
- (8)しばしば他人に嫉妬する、または他人が自分に嫉妬していると思いつまむ。
- (9)尊大で傲慢な行動、または態度

前に拙著⁸⁾で論じたように、自己愛性人格障害の診断基準は自己愛性人格についての記述で

中広：東京オリンピック マラソン・ランナー 円谷幸吉に関する病跡学的研究

あり、自己愛性人格障害の記述にはなっていない。自己愛性人格をもつ人たちが、困難な状況下で破綻し多種多様な表現形の症状あるいは不適応状態を呈する、つまり自己愛性人格にもとづく障害を起こす、そして精神科医の前に現れて自己愛性人格障害と診断される、と考えられる。この考えに従えば、自己愛性人格をもつ人と自己愛性人格障害をもつ人の違いは、つまるところ現実世界でうまくやれるかどうかの差であり、両者の内的世界に変わりはない。

ゆえにここでは両者をあわせて、自己愛性人格（障害）をもつ人と表記する。

13. 沈潜する自己愛

前節の診断基準を読むと、自己愛性人格（障害）をもつ人は自己中心的なエゴイストのように思われる。一見、メランコリー親和型の人たちの「誠実、律儀、世話好き、家族おもい」と、到底相容れない。

表面的にはそうであるが、自己愛とメランコリー親和型の存在様式がどう関係するか、自己愛性人格（障害）の基本的特徴である「誇大性」「賞賛されたいという欲求」「共感の欠如」を順に見ていこう。

「自己自身に対して量的にも質的にも過度に高い要求水準をかけた、それに遅れをとったとき（＝要求水準を達成できなかったとき）」発病が迫るとされるが、仕事熱心で勤勉な性格の持ち主が怠けるとは考えにくいので、要求を達成できないのは自己イメージが現実より「過度に高い水準」にあるのが原因ではないか。要するに、自分の能力を誇大に評価し客観的には達成できそうもない高いレベルを設定して失敗するのである。「自己自身に対して過度に高い要求水準をかける」ことは努力目標としては立派に聞こえるが、そこには誇大性が潜んでいる。

次は、「賞賛されたいという欲求」について。

メランコリー親和型の人たちは、他人への配慮を怠らない。他人に尽くし、献身する。また、彼らの価値判断の基準点は、常識であり「世間様」である。これらを、対人過敏ととらえる論者がいる。

なぜそれほど、他人に尽くし、世間の目を気にするのか。

この対人過敏は、人から自分への評価に過敏であることの表れではないか。評価に過敏であるのは、高く評価されることを望んでいるからであろう。彼らは、他人から、世間から、高い評価すなわち賞賛を求めているのである。家族のため、会社のため、世間のため、滅私奉公する（ように見える）彼らであるが、その隠れた動機は賞賛の獲得ではないか、そのような損得勘定を当人たちは決して意図していないにもかかわらず。

賞賛を得るためには、賞賛してくれる人を確保しておかなければならない。孤立は避けねばならない。よって常に彼らは、他人に配慮し同調性を発揮する。

彼らの同調性と他人への配慮には、自己愛性人格（障害）の基本的特徴のふたつめ「賞賛さ

りたいという欲求」が潜んでいる。

最後に「共感の欠如」であるが、これも彼らの他人本位な対人関係と相反するようで、ストレートには出て来ない。

他人への配慮を怠らず他人に尽くし献身する彼らは、他人と一体化して生きる、と言われる。単に文章表現上だけでなく現に「他人と一体化」しているのであれば、その「他人」は、他者ではない（ここでの「他者」とは、自己に絶対回収できないもの、のことである）。一体化されていないもの、一体化できないものを、彼らは「自己の生きる世界」に入れようとしない。「他人と一体化」という操作を介して他者を排除している、とも言える。他者がいないからこそ、愛する秩序を乱すものがおらず、彼らは安んじて生活できる。

自己と一体化している他人に共感したところで、結局それは自己に共感することである。だが「自己に共感」とは、「共感」の字義に反するであろう。「共感」は、自己でないものに対してしか使えない。

彼らの生活世界には、他者がいないから、共感すべきものがない。「共感の欠如」である。

逆向きに、次のように言ったほうがいいかもしれない。すなわち、彼らは、共感する能力が欠如しているから、自己に絶対回収できない、絶対的に不可知の、共感困難な、他者という存在を排除し、一体化可能なものしか「自己の生きる世界」に入れない。

これらは、体験的次元では意識されず、彼ら自身まったく気づいていない。

以上より、メランコリー親和型の存在様式は自己愛に裏打ちされていることがわかる。こういう見方は、意地悪な、あまりに天邪鬼な、と非難されるかもしれない。しかし、メランコリー型うつ病は真面目で立派な人になる病気とか、自己愛性人格（障害）は人格に問題あり、とのごとき道徳的価値判断を停止すれば、真理はおのずとあらわになる、と思う。

自己愛は、メランコリー親和型の表に現れず、奥深く沈んでいる。

14. 対他愛

メランコリー親和型の人たちは、他者とともにあるのではなく、他人へ配慮するだけの存在である。彼らは、賞賛を求めるといふ隠蔽された動機から、他人に尽くすこと自体を、献身すること自体を、愛する。他者を愛するのではなく、対他的であること、対他的な在り方そのものを愛する。

このような彼らの対他的存在様式への愛を、サルトル（Jean-Paul Sartre）の哲学用語「対他存在」とテレンバッハの人間学的精神医学用語「秩序愛」を真似て、「対他愛」と名付けたい。

秩序愛と対他愛は、自己愛のメランコリーな変奏である。

15. 危機的状況

メランコリー親和型の人たちが献身し尽くす相手は、家族（＝「家」）、会社、世間など、個人ではなく組織であることが多い。「組織」は何らかのルール（決まりごと、規律）で組織され維持されて存続しているはずだから、個人よりも偶発的突発的变化は少ないことが予想される。これは「自己の生きる世界の秩序」を愛しそれに固着する彼らにとって都合よい。安定した組織は、彼らに秩序だった快適な生活空間を提供する。

彼らの愛する秩序が支配する世界、彼らが尊重する権威と序列に守られた庇護的空間、それが彼らにとって安住の地である。そしてそこは、他者がいない自己愛的な場所である。

状況因と称される出来事は、新たな慣れない環境や、見知らぬもの、一体化できないもの、つまり他者が、彼らの前に現れる事態である。そのような他者は、彼らが愛する秩序の建設と維持に協力し、また献身的な彼らを賞賛するかもしれない。

協力せず賞賛しないかもしれない。それは危機的状況である。秩序の崩壊と賞賛の喪失が発病の契機となる、と考えられる。

「秩序の崩壊と賞賛の喪失」は、彼らが安住する「自己愛的な場所」の崩壊と喪失を意味する。そして「自己愛的な場所の崩壊と喪失」は、自己愛性人格（障害）をもつ人が多種多様な表現形の症状あるいは不適応状態を呈するに至るときの基本パターンである。

メランコリー型うつ病の発症は、自己愛性人格（障害）をもつ人の発症パターン、すなわち自己愛の危機ととらえることができる。

状況因と言われる「うつ病を誘発する結婚、出産、就職、昇進、家の新築、引越しなどのできごとは、正常心理からすれば日常的なできごと」であるが、メランコリー親和型の人たちにとっては自己愛の危機的状況である。

16. 昭和の精神

メランコリー親和型の具体的な性格像である、几帳面、強い責任感、堅実、綿密、勤勉、仕事熱心、誠実、律儀、世話好き、家族おもい、それから、トコトンがんばる、等々は、決してマイナスの価値を持つものではない。それどころか、美徳である。彼らが現代日本では珍しくなくなってしまったから、メランコリー親和型の人が減って、メランコリー型うつ病が少なくなった、と考えられる。

東京オリンピックや大阪万博の頃まで、多くの日本人がそのような美徳でがんばって、戦後日本の高度経済成長を支えてきた。

それらの美徳は、戦前までさかのぼることができそうだ。敗戦により日本の政治体制は変わったが、日本人のメンタリティは変わらず、第二次世界大戦（太平洋戦争）における「一億火

の玉」とのスローガンは、戦後高度成長期の経済戦争においても生き続けたように見える。模範社員は、企業戦士であった。この精神風土が転換しだすのが、1970年代後半であろう。

明治、大正時代にもメランコリー親和型性格が美德でないわけではないが、昭和になって戦争準備、戦争遂行のため強調されていったとしてよいのであれば、それは昭和とともに盛んになり昭和が終わるころ衰えたと言える。

ならばここでそれを、昭和の精神、と私は呼びたい。

円谷幸吉は、昭和の精神の体現者である。

彼は、運悪くオリンピックという悪魔に出会い、メランコリー親和型の存在様式がゆえに、絶望の淵に突き落とされる。

彼は、昭和の精神に殉じた英雄であった。

文 献

- 1) American Psychiatric Association: Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, Fourth Edition, Text Revision; DSM-IV-TR. American Psychiatric Association, Washington D.C., 2000
- 2) 松浪克文:「いわゆる「現代型」うつ病にどのように対応するか」精神科治療学 23(8):995-1004, 2008
- 3) 西丸四方:『やさしい精神医学(第3版)』南山堂 1986
- 4) テレンバッハ, H. (木村敏 訳):『メランコリー 改訂増補版』みすず書房 1985
- 5) 野村総一郎:『うつ病の真実』日本評論社 2008
- 6) 海老原英彦:「メランコリー親和型」『増補版 精神医学事典』(加藤正明 他編) 弘文堂 1985
- 7) 飯田真:「状況論」『増補版 精神医学事典』(加藤正明 他編) 弘文堂 1985
- 8) 中広全延:『カラヤンはなぜ目を閉じるのか——精神科医から診た“自己愛”』新潮社 2008
- 9) 橋本克彦:『オリンピックに奪われた命——円谷幸吉、三十年目の新証言——』小学館 1999
- 10) 川端康成:「円谷幸吉選手の遺書」『恋文から論文まで』(丸山才一 編) 福武書店 1987